第９回館長講座　『開発の激化と調査の激増』

司会： 皆様，こんにちは。館長講座にお越しいただき，ありがとうございます。

定刻となりましたので，本日は，第９回館長講座『開発の激化と調査の激増』と題しまして，鷹野館長にお話をいただきたいと思います。それでは，鷹野館長，よろしくお願いいたします。

館長： みなさん，こんにちは。

今日は，高度成長期の中で起きたことについて，お話ししていきたいと思います。

開発に際して遺跡が発見されたり破壊されたりする例は今に始まったことではありません。古くは平城京の造営に際して，造営予定地および平城宮の建設予定地に存在した前方後円墳が壊されています。今日奈良市立一条高校の北方にあたる部分は，ウワナベ古墳から続く丘陵の先端で，ここに貴族の邸宅を作るにあたり前方後円墳１基が完全に削られてその葺石や堀は庭の池として残っただけになりました。すでに今日私たちが古墳と呼ぶ高塚墳墓を中央では作らなくなっていた時期とはいえ，墓を簡単につぶして住まいを作るという意識はどういうものであったのでしょう。

平城宮跡のすぐ北に位置する市庭古墳は，佐紀盾列古墳群の中の東群に分類されています。東群に含まれる古墳は，西群のそれよりも築造時期が若干遅く，５世紀中葉から後半頃と推定されています。したがって，８世紀のはじめに平城京の建設が始まった時点には，巨大な前方後円墳がこの地に横たわっていたことになるのですが，すでに古墳が築造されてから２世紀半以上の歳月が流れていて，被葬者が誰であったかも，人々の記憶から忘れられていたのでしょう。

平城宮の都城プランでは，この古墳が邪魔になったのでしょう。当時は史跡保存の認識など露ほどもなかったに違いないので，前方後円墳のうち，南側にあった前方部は切り崩され更地にされてしまいました。当時の人々に死霊に対する恐怖はなかったのでしょうか。それとも，死者を葬った後円部はそのまま残したのだから，死者も眠りから覚まされなかったのでしょうか。

上総国では，国分尼寺の造営の際に，縄紋時代中期・後期の貝塚である祇園原貝塚のある場所を選んでいる。今風にいうと縄紋時代の遺跡を壊して，破壊してお寺を造ったということになります。

「国分寺や国分尼寺の造営の詔」は，741 年に出ています。また，以前に紹介しました茨城県の大串貝塚に関する記述のある「常陸国風土記」，これは 723 年頃までにできたとされていますから，８世紀前半の人々が，今日我々が貝塚と呼ぶ，ずっと以前の人々の生活の跡について，それが何であったのかということの記憶はなくなっていたということが言えるのだと思います。

しかし，祇園原貝塚の地に造営された尼寺の西門の造られた辺りからは，祇園原貝塚の調査の中で，非常に多量の人骨が出土している，つまり，縄紋時代の後期くらいの埋葬地であったのです。このことを奈良時代の人々がどう捉えていたのかは分かりません。

現在尼寺跡は国の史跡に指定されて，復元整備されています。

この中門と塀と金堂基壇だけが復元されています。鐘楼を造ろうという計画案がありますが，計画だけで未だに実現していません。

ここに門がありますが，この門の辺り，この一帯を貝塚として発掘調査していて，多量の人骨が出てきています。

これが重ねた図です。先程の図と実際の地形に当てはめて置いてみました。この出っ張りはこの辺になるんです。西門はここにありますが，これが貝塚として発掘したエリアで，その発掘した範囲の平面図がこれです。

このうちの，ちょっと見えにくいかもしれませんが，赤い点々がたくさんありますが，これは人骨が出土しているところです。西門というのはこの辺ですので，これは西門であるがゆえに貝塚としては調査しなかった。当然，人骨がたくさん出てくる。で，貝層が，おそらく，ここには広く貝層があるだろうと想定されますが，とにかく縄紋時代の遺跡があったところに尼寺が造られた。

尼寺がここにあって，市役所を挟んでこのあたりに僧寺・国分寺がありました。国分寺と国分尼寺を分断するようにして現代の市庁舎があるという形です。

それから，同じく遺跡を破壊というか，工事がきっかけになってみつかった著名な遺跡として静岡県の登呂遺跡があります。

登呂遺跡は，弥生時代の遺跡として非常に著名なところですし，その後の考古学界の研究進展の上でも大きなきっかけとなった遺跡です。

登呂遺跡は，第二次大戦末期，1943 年の 1 月に軍需工場，飛行機のプロペラを作る工場を建設するということで発見されたものです。このプロペラ工場の工事中に水田の下だいたい 1 m くらいのところから非常に多くの木製品が出てきました。さらに，それだけではなくて，水田の跡だと考えられる杭，あぜの杭ですね，この列も発見されました。

この時に工事にあたっていた鹿島組の小長井さんという方の判断で，その工事の時に発見された遺物は収集されて，一時的に中田国民学校に収蔵されていました。それを見た地元の在野の考古学者の安本博さんという方が，毎日新聞の静岡支局の森豊さんという新聞記者の方に伝えるわけです。それで毎日新聞がいち早く登呂遺跡発見の報道をしまして，それがきっかけで静岡県から文部省へも報告がされ，また東京の考古学者，当時の帝室博物館，現在の国立博物館とか宮内省や神社庁とかいうようなところにも連絡がいって，多くの学者・研究者たちがこのプロペラ工場に集まってきました。

そうした中の一人に，東京大学の原田淑人博士がおられました。原田博士が静岡県に進言をして，遺跡の重要性とか調査の必要性を強く訴えました。

その結果，県が主催する学術的な発掘調査が工場の建設と並行して実施されていきます。この当時のことですから，当然，軍需工場の建設の方が優先されてしまうわけで，非常に困難な調査だったようです。しかし，この時の発掘で出土した木製品の多くが，現在の登呂遺跡博物館の収蔵品となっているということから，この第一次の発掘が非常に重要なものだったということがよく分かります。この時の調査の記録は，静岡へのアメリカ軍の空襲などでほとんど失われてしまいます。遺物は残ったけれども，発掘調査の記録や印刷中の報告書の原稿などは，みんな失われてしまいました。

戦後になって，昭和 22 年 3 月に静岡市登呂遺跡調査会という組織が創られまして，登呂遺跡の調査にまさに日本中の考古学者，学生たちが集まってきました。登呂遺跡の発掘調査は，戦後の日本の新しい時代を象徴するひとつだったともいえるようです。この登呂遺跡調査会がもとになって，現在にまである日本考古学協会，考古学者の研究団体が発足しております。

もともと発掘調査というのは，開発工事に際して遺跡が発見される，あるいは遺跡であることが分かっているところで工事を行なうような場合には，当然ですが，所定の手続きを経て行われるわけですね。残念ながら，その多くが記録保存という言葉のもとに調査がおこなわれ，それが終わった後はほとんどが壊されてしまうのが一般的です。

この記録保存という措置がとられるようになったのは，1958年に始まりました名神高速道路の建設の頃からだと言われます。この頃，学生だったり，あるいは大学院生だったりといった人たちの回顧録の中に，初めて，この調査でお金をもらって発掘したという回顧談もあります。もちろん名神高速道路建設のときには，路線に関わった遺跡は全て調査後，破壊されています。

1960年代までのこういった遺跡破壊の状況をまとめた『埋蔵文化財白書』が，先程紹介しました日本考古学協会から出ています（1971年）が，ここでは遺跡破壊・遺跡の調査の原因として，宅地造成，農業改善事業，鉄道・道路建設事業をビッグ3として挙げています。1960年からの池田勇人内閣の高度経済成長政策のもとで，大都市周辺には，大きな住宅団地が造成され，高速道路計画も着々と進行していきました。また，農業基本法によって，政府の援助のもとに，農地の構造改革事業が進んでいる時代でもありました。これに応じて，工事に先立っての事前調査，緊急調査という言い方もしますが，そういう事前調査・緊急調査の名のもとに，発掘調査も増加していくわけです。

数字を挙げますと，1963年に発掘調査・緊急調査として届け出のあった発掘件数が277件，5年後の1968年には，それが611件に増えている，2倍以上増えています。この増えていく傾向はこのあと長く変わりません。

もちろん遺跡は，発掘されるだけでなくて，調査されてきちんと記録をとって，報告書が作成されてという処置がとられて壊されることになるわけですけれども，まだ地方自治体にこういった発掘調査請負体制が整っていなかった時代には，大学に対して調査の依頼がされるということもしばしばあったようです。なかには，現在では考えられませんけれども，一つ大きな遺跡の真ん中に1本のトレンチ，溝をあけて，遺跡の性格を把握するということで調査を終わらせてしまうというようなこともあったそうです。

発掘届けの調査件数をグラフにしてみました。これは1960年代から1970年代の文化庁への届け出件数です。この一番下の曲線，これは学術調査，研究のために行われる発掘調査，それは，ほとんど変わらないです。一番外側が総件数ですけれども，これは，ほとんど緊急調査の増加によるグラフの傾きということが分かります。

曲線が漸増の方向から急増の方向に変わる変曲点といいますか，それがこのあたりです，1971年から1972年頃。この頃は覚えてらっしゃるかと思うんですけれども，田中角栄の時代ですね，角栄さんが「日本列島改造論」を掲げて，とにかく山を削って，谷を埋めて，平らにして，土地を作って，それから，日本中に新幹線網や高速道路を造るんだという政策を掲げて実行していったわけです。

いま我々は，その恩恵をかなり受けているわけですけれども，しかし，遺跡にとっては，これは，とんでもないことだったわけです。

先程言いましたように，山を削って谷を埋めるということをすると，今まで遺跡が見つかっていなか

ったような所でも遺跡が見つかるようになるわけです。人の住んだ跡はないのではないかなというような山の中でも人々の生活の跡つまり遺跡が見つかってきます。

この後どうなるかと言いますと，だいたいこの辺で，石油ショックくらいなのかな，ちょっと鈍って，さらに細かな調査がたくさん増えていきますので，この右上がりの傾向はずっと変わりません。

いま調査件数のことを申し上げましたが，この頃は調査件数だけではなくて，一つの発掘調査における調査面積や調査期間も激増していきます。調査の規模が非常に拡大していくことになります。

まず２つここに例を挙げますが，北海道の函館市で函館流通センターの建設ということで，西桔梗遺跡群の調査がされました。これが 25,000 ㎡を 1971 年・1972 年の 2 年間で行われて，もちろん発掘報告書も出ています。

それから，北海道で大きいのは，千歳空港の拡張移転。これは現在の新千歳空港のある所ですね，そこについての遺跡の調査，これは「美沢川流域遺跡群」とまとめられていますけども，これは 1976 年から 1995 年まで発掘調査がされまして，17 遺跡，266,000 ㎡の遺跡の調査が行われました。これは，北海道が広いからできたというわけでは決してなくて，日本中のどの都道府県をとってみても，こういった大プロジェクトに先駆ける調査というのが行われていました。

この西桔梗遺跡群は，左が航空写真で，右が地形図，これが遺跡の範囲ですね。何ヶ所か遺跡があることがお分かりになるかと思います。

縄紋時代の前期から中期にかけての大規模な遺跡群でありまして，その後，弥生時代に相当する続縄紋時代中期に至る遺跡が調査されました。竪穴住居群・土壙群，平面形が五角形の竪穴住居，これは中期くらいの住居ですけれども，そういう特色をもったものが出たり，続縄紋時代の土壙群には，硬玉製の管玉が副葬されているものもありました。この管玉については，本州の弥生時代中期のもので，本州から北海道にもたらされたものだということが分かっています。また，縄紋時代中期の竪穴住居址の中には，火災に遭ったものも出て来まして，そこに残された炭化材を調べますと，クリ，ナラ，イタヤ，ヤチダモといった広葉樹で，針葉樹の類が一例もなかったことから，縄紋時代中期の北海道の，道南の端っこですけれども，この地域は現代よりも比較的温かかったということが推測されます。

千歳空港移転に伴う美沢川流域遺跡群の遺跡の調査は，昭和 51 年，1976 年の夏から始まりまして，当時の建設予定地一帯は鬱蒼たる山林で，50m間隔で測量のための道筋が通っていただけで，方々に熊の行動痕跡があったということです。

ここは，当初，北海道教育委員会が調査していましたが，昭和 54 年にこの調査をするためにといってもいいような北海道埋蔵文化財センターという発掘調査機関が設けられ，ここが調査業務を引き継ぎました。この年にも熊が出ていると。この調査というのは，北海道では苫小牧東部工業地帯の調査と並んで，今まで経験したことがないくらい大規模な調査だったということです。この新千歳空港予定地の調査は，20 年間続けられたわけですが，平成 7 年度に現地での調査が終了し，さらに出土品の整理をして，1997 年度にようやく終了しています。

こういう冊子が出ています。表紙の動物形土製品の複製がたまたま当館の応接室に置いてあったので

持って来ましたが，実物は，こんなに大きくはありません。これが，美沢川流域遺跡群で出土した遺物のある意味，象徴的なものです。これは縄紋時代後期から晩期初めくらいにかけての動物形土製品ですが，実物は重要文化財に指定されています。これは一体何なのでしょう。海獣というか顔があり，目もこうあるわけですけれども。口もある。他にも縄紋時代の足形付土板，翡翠の玉，漆塗りの櫛，周堤墓，これは周りに土手を作って中が窪んでいるお墓，盛り土をしたお墓など，様々なものが出て来ています。挙げきれないほどの豊富な遺構や遺物が出て来ています。大規模な調査をすれば色々なものが出て来るということになるわけです。

次に，大規模な調査の例として，長野県の中央自動車道関連遺跡の調査があります。昭和45年から昭和53年にかけて行われまして，長野県内の路線の長さが122kmだそうで，その中で193ヶ所の遺跡が調査されました。岐阜県境から伊那谷を通り，諏訪湖を眼下に見て，八ヶ岳山麓の山梨県境までの道路です。言ってみれば，長野県の真ん中付近に一本の長いトレンチが掘られ，その上に中央自動車道ができているわけです。

この調査が始まったのが昭和45年で，長野県教育委員会では「長野県中央道遺跡調査会」という組織を作り，この事業を推進してきました。12年の歳月を経て，昭和57年に全ての調査が終了したわけです。現場での調査は，昭和53年度に終わりましたが，その後も出土した遺物の整理作業を引き続き行いまして，昭和57年まで行われていました。全長122㎞，283,000㎡，総事業費およそ10億3千万円でした。

この発掘調査の成果を示す報告書が，全部で37冊，なかには，枕になるような厚いものもあります。長野県における一大文化事業ともいっていいものですね。もちろん，この調査は，中央自動車道を建設するということのために，やむをえず記録で残す目的のために実施されたものです。しかし，この事業の成果によって，歴史的にも，学術的にも良好な資料というのが多数提供されましたし，加えて文化財の展示収納施設というのが長野県の南信各地域に充実してくるという原因の一つにもなったわけで，文化財保護意識を高揚するという大きな役割を果たしたと長野県の教育委員会では自讃しています。

『中央自道遺跡調査のあゆみ』という簡単なまとめの冊子が1981年11月に出されています。この表紙に使われているのが，阿久遺跡という遺跡です。この阿久遺跡については後で触れることにします。

東京の近郊でも，多摩ニュータウン造成関連の調査というのがありまして，九州でも，新幹線関連遺跡の調査というのも大規模だったわけです。

先程，日本考古学協会で『埋蔵文化財白書』を出したと言いましたけれども，『第2次埋蔵文化財白書』が1981年にまとめられまして，これでも，やはり調査の原因はあまり変わらないのです。こういった大規模な調査の中で，幾多の新しい発見があったり，また研究成果が生まれてきたりということは否定できないのです。遺跡の大規模破壊というのが，より多くの発見，あるいは研究成果を生むというのは，非常に矛盾したことであるわけですけれども，これは考古学という学問の持つ宿命なのかもしれません。

私が，学生の頃，日本全土に37万箇所の遺跡があると言われていました。現在は43万箇所と言われています。先程のグラフをずっと追いかけていきますと，そのうち37万だとか，43万だとか，なくなっちゃうわけです，放っておくと。

そうすると，どうなるんだろう？冗談のように言われたのが「アーム・チェア・アーケオロジー」と

いう言葉でして，きっと将来の考古学者というのは，自分で発掘作業をせずに発掘調査の結果をまとめた報告書を見て，それで研究する，言ってみれば文献考古学とでもいうのでしょうか，そんな風になってしまうのではないかということすら言われていました。

幸い遺跡は，破壊されるものも，たくさんありますけれども，調査成果が認められたものは史跡として保存されて，残っていきますので全部なくなることはないと信じています。

多摩ニュータウンですが，東京の西部の多摩川の右岸一帯，多摩市，八王子市，稲城市，町田市の4市にまたがる約3,000haの広大な地域です。現在多摩ニュータウンが抱えている大きな問題というのは，建物の老朽化とそこに住む人たちの高齢化です。

この多摩ニュータウンを造成するにあたり，遺跡がどこにあるのか，事前調査，遺跡の分布調査をしました。これは何をするかというと，ひたすら下を向いて歩くわけです。遺物が落ちているか，いないか，遺跡があるか，ないかを探していくわけです。造成工事を始めようといった段階では，わずか38箇所しか遺跡はなかったが，その後，分布調査を繰り返していきますと，どんどん，どんどん遺跡が増えていきます。ここにあるように当初の30倍近く遺跡が増えていったということです。これは最初，見落としていたということもあるのでしょうけれども，それだけではなくて，遺跡を見る目が変わってきたということがあります。先程も言いましたが，田中角栄の時に，山を削って，谷を埋める，山の中にも遺跡があるということが認識されてくると，そういう所にも足を運んでみようと，分布調査の足を運ぼうということもあって，増えていったわけです。

このような膨大な発掘調査，ここでは遺跡破壊と言っていますけれども，それが進むにつれて，調査後完全に破壊されることを免れた遺跡については，何らかの形での「活用」が求められるようになるわけです。佐賀県の吉野ケ里遺跡とか青森県の三内丸山遺跡を典型とするような，運よく調査の成果が高く認められて保存されることになった遺跡，これらは何らかの形で「活用」が図られるようになっていきます。

吉野ケ里遺跡では，発掘調査の最中に1日2万人もの人が遺跡を訪れました。それから，吉野ケ里遺跡については，佐原真さんという考古学者が「邪馬台国の風景が見えるようだ。」ということを言ったわけです。邪馬台国の風景というと「邪馬台国はどこだ」と日本中がパッと飛び付くわけです。

縄紋にも邪馬台国があればいいのにとずっと思っていたわけですけれども，三内丸山遺跡で，それが邪馬台国と同じような現象が起きていった。三内丸山遺跡は，縄紋時代の遺跡としては面積が広い・規模が大きい・存続期間が長いという3つが整った遺跡だということで注目を浴びていったわけです。

「活用を図る」という際に，しばらく前には，どうやって活用するのか，どうやったら活用なのか，ということについての議論も随分されました。人によっては，遺跡というのは遺跡であることが重要なのだから，そこに何ら人の手を加えることなく，ただ遺跡のままで置いておくのが良いのだという考え方の人もいました。ちょうど，芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」という歌にひっかけて，そういう考え方の人を「夏草や派」などという言い方もしました。

しかし，そうではなくて，やはりその遺跡に立った人が，その遺跡がどのような遺跡だったかを視覚的に分かるようにしていくのが「活用」なんだという考え方が強くなっていきます。

この多賀城跡でも，もう少しすると，だいぶ先ですけれども，南門が建てられることになっています。

現在では，多賀城跡は政庁跡の基壇があって，柱の跡が見えるだけになっていますが，もっと立体的なものがあって良いのではないかという考え方が出てくるわけです。

遺跡に，竪穴住居を復元したり，もしかしたら，創造の産物でしかないかもしれない構築物を造ったりするということについての疑問は殆どなく，それが当然のことのようになってきているのです。

これには別の理由もありまして，発掘調査の結果，非常に重要であると認められて保存されることになった遺跡というのは，殆どの場合，公有地化が図られます。公有地化には，当然ですが，税金が使われて，買い上げられるわけです。税金を投下し，買い上げられた土地，遺跡は，ただ寝かせておくわけにはいかないというわけです。遺跡が，ただ守られるだけで良いという「凍結保存方式」で，何も使わないでおく，何もしないでおくというのは，おそらく元々の土地所有者も納得しないでしょうし，税金を投下することについての説明責任も果たされないことになるでしょう。このような議論が盛んだった頃には，会計検査院的な発想のもとに取り扱われたのです。そのような理由から，何らかの形で視覚的に復元できるようにしようというのが当然のこととなってきたのです。

文化庁では，文化財保護委員会の時代の昭和40年代から，遺跡の公有地化だけではなくて，公有地化した遺跡を史跡公園にするなど視覚的な復元をすることについての補助金を出すようになっていきました。その第一号が大阪府枚方市にある特別史跡の「百済寺跡」です。

しかし，百済寺跡がどのようになっているのかというと，多賀城跡と同じように基壇があって，柱の跡が置かれていて，一画に児童遊具が置いてあるだけなのです。そうやって公園として保存するだけでは，遺跡の活用につながらないのではないかということもあり，遺跡を博物館の資料として活用しようということで遺跡博物館という考え方が重要になってきました。この東北歴史博物館も多賀城跡を対象の一つとする遺跡博物館という役割も持っているのです。

さて，そのような大規模な遺跡の発掘調査が盛んに進められるようになってきて，もたらされたことのひとつに，集落の研究が非常に進んだことがあります。ここでは縄紋時代の集落研究についてみます。

遺跡のほぼ全体を発掘して，集落の全容を明らかにしようという調査，これは開発工事によってだけ行われたわけではなく，大規模調査が多くなる以前からも全面発掘に近い調査は行われてきています。ただ，1972年以降と違うのは，こういった調査が，ごく少人数の手で非常に長い時間かけて調査されて，しかも，多くの場合，その遺跡は破壊されずに現在まで残されているということです。

その代表的な例が，長野県の茅野市にある尖石遺跡，ここも多賀城跡と同じく特別史跡です。ここは，宮坂英弐さんという方が1940年から独力で調査を進めていきました。1940年というと，日本ではまだ文化財保護法がありませんから，発掘調査は，好き勝手にというと語弊がありますけれども，できるわけです。その中で，竪穴住居を37件発掘しまして，縄紋時代中期の集落の様子を明らかにしています。

この谷を下りた所に，「尖石」という石があります。先の尖った大きな石です。縄紋時代に，石斧などを研いでいた砥石として使われた石なのではないかと考えられるこの石にちなんで「尖石遺跡」といいます。また，谷を挟んで与助尾根という尾根がありますが，ここも宮坂さんによって調査されています。

宮坂英弐さんは，明治20(1887)年生まれで，1975年に亡くなっています。宮坂さんは，長野県の小学校の教員のかたわら，尖石遺跡の発掘調査をしていきました。縄紋時代中期の集落研究の基礎をつくったといっていい人です。

ちょっと薄くて見にくいかもしれませんが，尖石遺跡の住居の分布です。竪穴住居として認識された

ものの他に，炉の跡だけ認められるというものもありますので，実際の集落の件数，建物の件数はもっと多かったのではないかと思われます。

尖石遺跡の調査の成果から，「縄文時代集落復元への基礎的操作」という水野正好さんの論文が出ましたし，与助尾根遺跡の調査成果からは「縄文時代の社会組織」という論文が大林太良先生から発表されています。

尖石遺跡の竪穴住居址で一軒だけ屋根がかけられているものがこの辺にありました。何でここだけちゃんと保存しているのだろうと思ったら，これは皇族のどなたかが御手掘りされた竪穴住居であるということできれいに残してある，というのが記憶に残ります。

現在，この辺りに尖石遺跡の博物館がつくられていて，ここも遺跡博物館として機能しています。

それから，この例は大規模開発とはちょっと違いますが，千葉県の松戸市にあります幸田貝塚をとりあげます。これは「こうで」と読みます。

ここは，1971 年～1986 年にかけて 17 次にわたって非常に小面積ずつ調査をしています。道路をつくるというとその部分を調査をする，というような小規模な調査がずっと長く続いてきていました。その結果，縄紋時代の前期の貝塚が南北 250m，東西 180m にも及ぶ非常に広い範囲に分布するということが分かっています。馬蹄形貝塚のように，輪のように貝塚が並んでいるのではなく，地点貝塚といい，ポツ，ポツ，ポツと貝塚が分布しているのです。

この遺跡については，昭和 3 年に東京帝国大学が「日本石器時代遺跡地名表」を作っていますが，その中にも紹介されているもので，ここは研究者たちの高い関心を今日まで集めてきている所です。

この 17 次にわたる調査は，松戸市教育委員会によって行われていて，毎年，毎年，薄い冊子の簡単な外報が出されています。まだ全体の報告書というのがきちんと出されていないのですが，縄紋時代の前期を中心とする竪穴住居址が 160 軒以上見出されています。ですから，この貝塚が大集落を伴うものだということは明らかになっています。

大量の土器，石器，貝塚の中からの獣骨，魚の骨，炭化したクルミなど，当時の暮らしを彷彿とさせるような遺物が多数出土しています。

中でも，特に，関山式土器と称される幸田貝塚出土の土器群というのが，これも縄紋時代の土器研究の上で非常に重要な資料となっています。関山式土器というのは縄紋時代前期前半の土器で，すごくやっかいな土器なのです。何がやっかいかと言いますと，胴部にいわゆる縄紋が付いているのですが，普通の縄をただ転がしただけではなくて，縄に色々な細工をしているのです。組紐を転がしたり，縄の先端に細工をして転がしたりして細工をしています。

それから，面白いのは，これですね。これにもありますが片口が付いています。これは，液体を注ぐという行為があることを示します。片口が付いている土器が出てくる時期というのは，そういつでもあるわけではありません。草創期に少しありますが，あと前期のこの時期と，それ以後は土瓶とか急須とかの形で液体を注ぐ土器が，縄紋時代の後半にはいくつも出てきます。これらの幸田貝塚の関山式土器は重要文化財に指定されています。

遺跡はどうなっているのかというと，公園の中に幸田貝塚という説明板が立っていて，当時の発掘の時の写真などが添えられています。

左上が，ここにあるのが，説明版ですけれども，貝塚だということがどこにも分からない，貝が見えるわけではなく，ただ，ここに木の柱・石の柱が立っています。遺跡全体ではなくて，遺跡の一部が公園として，広場として残されているわけです。幸田貝塚の大半は，隠滅したといっていいようです。

つぎに，先程名前が出て来ました長野県の阿久遺跡です。昭和 50 年～53 年（1975 年～1978 年）にかけて長野県の中央道遺跡調査会が発掘調査しました。八ヶ岳の山麓には，縄紋時代の遺跡が非常にたくさんありまして，阿久遺跡は前期のものですが，その後の中期の遺跡がたくさんあります。この八ヶ岳の西南麓一帯というのは，水がよく湧きますし，非常に縄紋時代の人たちにとって，生活しやすい場であったことがうかがわれます。

阿久遺跡ですが，関山式，黒浜式，前期後半の諸磯 a 式・諸磯 b 式という土器の時期の集落です。それぞれの時期ごとの変化が示されています。

中央道遺跡が，193 ヵ所調査されたと紹介しましたけれども，そのうちで保存されたのはこの阿久遺跡ただ一ヵ所だけでした。ただ，保存されたといっても，当初，この阿久遺跡の所はカットして道路を通す予定でしたが，工事の方法を変更して，阿久遺跡の上に盛り土をしてその上に道路を通すということにしたのです。遺跡は保存されたといいますが，これは保存というのでしょうか。半永久的に遺跡の姿をみることができないわけです。このようなことを願ってはいけないでしょうが，大規模な地震が起きてですね，中央道の道路がズタズタに壊れて，阿久遺跡が出て来たとなればまたみられますけれども，そんなことは，あってほしくないことでもあります。埋め戻された阿久遺跡は，見えない状態でも国の史跡に指定されています。

写真で，ちょっと分かりにくいかも知れませんが，右側の写真が諸磯 a・b 式期の前期後半の面です。この白い点々は，石です。全部石です。この中に，こういうところとか，こういうところとか，まとまりがありますよね，これは石組です。こういう石組ですと，秋田県鹿角市の大湯環状列石というのが，よく例に出されますが，それよりも古い時期の石組遺跡で，日時計のような遺構はないけれども，確かに石組を遺している。この累々たる石を見て，これは保存しなければということになったのでしょう。この下を調査しますと，竪穴住居がたくさん出て来ています。

発掘調査された範囲で，前期前半の関山式の住居址が 30 軒，次の黒浜式の時期の住居址が 18 軒です。それが 2 軒から 3 軒を一つのグループとしてのまとまりがみられることが指摘されています。しかも，この集落というのが，ほぼ馬蹄形，このような半円形であるということが，明らかになってきています。たくさん竪穴住居は出ているけれども，一時期に同時に建っていた住まいは 2～3 軒だろうということも分かっています。

縄紋時代前期後半の諸磯期の住居址が発見されたのは，1978 年のことです。私は，その頃，イランの調査に行っておりまして，この情報を全然知らずにいましたから，帰ってきたら大騒ぎになっているので，「何それ？」というのが正直なところでした。

この礫群の中で径 1～2m の集石があり，それが 10～20 基集まって 1 つの単位となっています。全体としてこのような形になっています。半円形というか，環状というか，そのような分布の集石遺構とな

っています。

では，この石を並べるというのは，一体何なのか。これはもう推測しかないのですが，よく考古学では理由が分からないと，祭祀関係だね，お祭り関係だね，そうじゃないのかと，まとめてしまうところがありますが，これも祭祀関係の遺構かなといわれています。

この阿久遺跡の報告書は A4 版の 2 分冊であり，家で測ってみたのですが，厚さが二冊合わせて合計 5.5cm の報告書です。こんなに分厚くて，持って歩くのはとても大変です。

薄くて見えにくいかもしれませんが，石の部分だけ集めた図のコピーですが，黒くなっている所が集石の分布です。

次は千葉県船橋市の高根木戸遺跡についてです。これは，船橋立高郷小学校の建設に先立って調査された遺跡です。昭和 42 年 7 月～9 月にかけて 48 日間，約 1 万㎡，75 軒の竪穴住居，129 の小竪穴遺構が明らかにされました。馬蹄形に並ぶ集落を全掘した例です。ちなみに，この遺跡は B5 版で厚さが 4.5cm の『高根木戸』の報告書になっています。

ここの場合は，住居址の切り合い，重なり具合，出土した遺物の検討をしていった結果，大きく 4 期に分けられる集落の変遷が明らかにされています。4 期に分けられるという中で，その中でも同時に存在していた集落を構成していたのは，だいたい 5～8 軒，多くても 8 軒くらいという結論をだしています。

このように馬蹄形集落とか環状集落とかいいますが，最終的にこのような形になるわけで，集落として存在していた時期に，必ずしも馬蹄形・環状形に並んでいたというわけではないのです。

この調査は，馬蹄形の集落を全掘したという例で非常に著名な遺跡です。千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館にもこの遺跡の写真が展示されていました。

ここでは，犬が埋葬されているのがみつかっています。犬の埋葬墓です。人の墓域の近くにですね，3 体の犬が折り重なって埋葬されていたということです。

犬の埋葬は，ここ東北歴史博物館の展示室にもあります。気仙沼市田柄貝塚のもので，ご覧になってみてください。

船橋市では，出土した犬を元に縄紋犬を復元しました。ここ東北歴史博物館にも，縄紋犬が一頭います。ここの博物館のものは，足がくっついていて動かせませんけれど，船橋市のものは動かせますのであちこち出張しているようです。

それから，大規模遺跡ということで，東京都町田市の鶴川遺跡の例を紹介します。

当時の日本住宅公団によって宅地が造成され，それに伴う事前調査が行われました。標高 89m の台地上に住居址がたくさん出て来ています。丘の東側の縁に沿って，43 軒の住居址が調査されていました。ここでも，住居の位置が時期が変われば移動することが分かり，半環状の住居址の分布が明らかになっています。

先程お話しし忘れましたが，高根木戸遺跡の集落の真ん中には何もありません。小竪穴があるだけで，住居はなく，よく中央の広場といわれます。ここ，鶴川遺跡でも丘上の縁に沿って住居が並んでいて，真ん中には家がない様子が明らかになっています。

中期前半のものが 6 軒，だいたい，この辺りです。加曾利 E1 式の時期のものが 10 軒でこの辺りで，それから加曾利 E2 式の時期のものが 17 軒でこの辺り，中期終末期のものがこの辺りにあります。このように時期が変わると，場所を変えて家を造っていく様子が分かりました。

当時としては，関東最大級の縄紋遺跡という言い方もされました。上は航空写真です。

さらに，もっと大きな遺跡の調査が群馬県の三原田遺跡です。

ここは，群馬県企業局が，住宅団地を造成する時に始められた調査です。1972 年の 7 月～8 月の半ばまで予備調査がされ，11 月から本格的に調査が開始されました。そして，1974 年 2 月に終了しました。発掘面積が 4.8ha，調査日数 389 日，調査員・調査補助員・一般作業員を含め延べ 22，007 人を動員しました。発掘作業が終わった後，1978 年 3 月まで整理作業が行われ，報告書が刊行されますが，要した費用は約 8 千万円だったということです。

今からすると，この 8 千万円という費用は，たいしたことないと思われるかも知れませんが，当時としては大変な額の調査だったのです。

遺跡のこのような写真というのは，見てもあまり面白くないですよね。ただ穴が開いているだけって，何がなんだか分かりません。ただこのような写真は必要なのです。

発掘された遺構は，縄紋時代前期半ばの黒浜式，それから後期の堀之内式の住居址 341 軒が出ています。このように円形にみえる所，こういうのは住居です。それ以外のポツポツとした穴はピットと言います。ピットが約 4,000，配石遺構 1 つ，出土した遺物で完全に復元できたもの，完形土器が約 650 個体，遺物を収納・整理したケース 3,391 個ということです。

完形土器は，中期前半の阿玉台式，勝坂式，中期後半の加曾利 E 式，曽利式が多いです。住居址も，多くはこれらの中期のものだったということです。

これは，図面を合成したものですが，これでも分かるように住居址は環状に並んでいます。集落というのが，最終的に環状を呈するということが明らかになっています。そして，また中央部分には何もなく，広場になっているのが分かります。

ここでは航空測量を導入して，遺跡全体の遺構を図化しました。小規模な調査ですと，普通は平板測量をしますが，この時は，航空測量をしました。その意味でもこの当時としては画期的な調査だったといえます。

この調査を担当した方は，私の大先輩ですけれども，その先輩が，遺物を処理・図化した後に，遺跡のある現地に穴を掘って，そこに遺物を収納するということをして，大問題になりました。普通だと，発掘したものは全て持って来るわけですが，持ってこないで現地に戻して，大事件になりました。

ちなみに，この三原台遺跡の報告書は A4 版で，写真カード別図も含めた箱入りの報告書で，6.3cm の厚さのものができています。

そして，岩手県紫波町の西田遺跡を紹介します。

これは，東北自動車道の建設に伴う調査で，ここでは見事に，ゾーニングといいますか，区域分けができました。中央部に非常に多くの土壙墓，お墓として使われる穴があり，それを取り巻くように，普

通の住居よりは規模の大きい掘立柱の建物，さらにその外側に通常の竪穴住居が造られたことが分かりました。その真ん中の所，本当に真ん中の所にはあまり何もない。このように一つの集落の中でゾーニングが行われていたことを非常に明白に示してくれた遺跡です。

次が，紹介する最後になりますが，やはり千葉県の松戸市の遺跡，貝の花貝塚です。

この貝の花貝塚も，当時の日本住宅公団による団地造成にかかわる調査で，昭和 39 年～昭和 40 年にかけて，延べ 173 日間行われました。この時は松戸市の教育委員会が主体でしたが，当時の東京教育大学の考古学研究室の先生に調査を依頼し，東京教育大学の学生達が中心となって調査を行いました。土曜，日曜を利用して行われた調査でした。この馬蹄形の色の着いた所が貝層の分布ですが，馬蹄形の貝層の全てを掘って調査した画期的な全面発掘でした。画期的な調査ですが，このような調査は二度として欲しくないと思った調査でした。なぜなら，遺跡全部をなくしてしまう調査だったのです。少しでも残しておけば良いのにと思いますが，残っていません。

現在，これは遺跡から出てきた土偶の顔ですが，このモニュメントが建っていて，ここに貝の花貝塚ありきというのを物語っています。

ここでは，貝塚の堆積の部分を全て掘ったわけですが，そうすると貝層の下，またはその周辺から住居址が出てきたのです。それと共に人骨が 51 体得られていますし，馬蹄形貝塚の構造が明らかにされました。構造というのを大まかにいいますと，このようないくつかの窪みの中に貝が捨てられていき，そして，それが繋がっていって，馬蹄形を成すに至ったことが分かりました。その窪みというのは，だいたい破棄された竪穴住居です。この感覚は，今の我々も同じですね，平らな所にポンと捨てるのは抵抗がありますが，窪んだ所に捨てるとか，なだらかな斜面とかに捨てるのはあまり抵抗なくできるものではないでしょうか，やっちゃいけないことですけれども。窪みの中に堆積した貝がだんだんだんだん繋がっていって，馬蹄形を成すようになるわけです，ということは，その前に馬蹄形に近い形での竪穴住居の存在があったのだということが言えます。

そしてこの時は，貝層の調査だけではなく，全面ではないのですが，真ん中に，トレンチを入れていきました。今まで，馬蹄形貝塚の中央には何もないといわれてきましたが，貝塚の内側の部分を調査したところ，この部分ですが，漆黒色土といわれる真っ黒な土が出て来ました。この土の中から貝塚の形成の時期の後の縄紋時代晩期の遺物が出てきました。おそらく，この真っ黒な土の中に晩期の人たちの生活の跡というのがあると思われますが，残念ながら，真っ黒で色の区別がつかず，遺構の存在を見出すことができませんでした。しかし，ここで初めて馬蹄形貝塚の内側の空間には黒色土があり，そこには縄紋時代晩期，特に晩期前半の遺物が大量にあるということが分かりました。

一箇所でこのようなことが分かりますと，この後，次々と同じような事例がみつかるようになりました。

市川市の堀之内貝塚でも，やはり貝塚が馬蹄形になり，その中心にも黒い土があり，そこからもやはり晩期の遺物が出てきました。それから，町田市のナスナ原遺跡，これは東急電鉄の車両基地を造るために発掘調査した遺跡ですが，これは貝塚ではないが，漆黒色の土の中に晩期の遺物が大量に出土しました。ただ，この黒い土が，どうして出来るのか，成因の分析には至っていません。

晩期の貝の花貝塚に至る頃までには，遺跡の数も文化的なものについても，後期までは馬蹄形貝塚を

形成するほど，活発な人々の生活の跡がみられますが，晩期に入ると，特に関東地方では「人の生活の跡はなくなるのでは」といっていいくらい，遺跡の数がぐっと減っていくという傾向がみられました。しかしこれは減っていくということではなく，見つかっていなかっただけだということがここで分かりました。

先程も言いましたように，ここから埋葬人骨のほか，犬の埋葬した遺骸があったり，イノシシ，ウリンボウの骨も発見されています。

非常に残念ですが，貝の花貝塚には現在，このモニュメントが残っているだけとなっています。

ここでは，集落の変遷というのも考えられていまして，色が分かりにくいかもしれませんが，この辺のグループとこの辺のグループとこのグループ，それからもう一つこっちのグループ，というようにグループ分けができるようで，時期を変えて建物の場所を変えていきます。

必ずしも，こうやって，一定の方向に回っているわけではないが，このようなことが，ここでも確認できました。

何度も言いますが，この貝の花貝塚はもうないわけですが，この調査というのが非常に大きな知見をまとめてくれたことは言うまでもありません。

このような遺跡の全面発掘とか，遺跡の大部分を発掘調査してしまう例は，ここに紹介しただけではなく，例は枚挙にいとまがないくらいです。その結果，得られた莫大な量の遺物・資料の再検討を通じて，住居址の形態の分類と時期毎の区分，炉の形態の分類と変遷，家の出入り口の所に埋められた土器や子どもを土器の中に入れて埋葬した埋甕の集落の中における分布と機能などの研究が進められていきました。それらを総合した集落の構造と変遷がみてとれるようになってきました。つまり縄紋時代の復元という方向に研究が進められるようになっていったと言えるかと思います。残念ながら，そういった成果というのは遺跡が無くなるのと引き換えに得られるという悲しい現状でもあるということです。

ご清聴ありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。

今日は「開発の激化と調査の激増」と題しまして第9回の館長講座をお聞きいただきました。最後までありがとうございました。

次回は，10月8日「自然科学の手法の考古学への寄与　年代決定法あれこれ」と題しまして，第10回目の館長講座を予定してございます。10月8日は特別展の開幕日にも当たります。またいらして下さい。今日はどうもありがとうございました。